加東市所在

田中・蓼原遺跡

地域連携推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011（平成23）年3月

兵庫県教育委員会

田中・蓼原遺跡

地域連携推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011（平成23）年3月
兵庫県教育委員会

例　言・凡　例

1．本書は地域連携推進事業（国道372号線社バイパス建設）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書のうち、兵庫県加東市田中に所在する田中・蓼原遺跡の報告である。

2．発掘調査は、開発事業者である加東土木事務所（当時は社土木事務所）が所属する北播磨県民局長の委託を兵庫県教育委員会が受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および兵庫県立考古博物館が実施した。

整理作業についても同県民局の委託により兵庫県立考古博物館で実施した。

3．田中・蓼原遺跡の本発掘調査は、平成20年度に実施したが、当遺跡の範囲を含む確認調査は平成18年度におこなった。

各年度の発掘調査担当者および兵庫県が設定した遺跡調査番号、調査期間は以下のとおりである。

平成18年度　確認調査（調査番号 2006146）　田中・蓼原遺跡の発見と範囲確認調査

2007年１月９日～１月31日　　西口和彦　中川渉

平成20年度　本発掘調査（調査番号2008190）　開発事業地内の記録保存のための本発掘調査

2009年１月16日～３月３日　　岸本一宏　鐵英記

4．発掘調査後の地形測量は空中写真測量とし、平成20年度調査部分は株式会社ジオテクノ関西に委託して実施した。その他の詳細実測は調査員等が実施した。

5．出土品整理事業は平成21（2009）年度および22（2010）年度に兵庫県立考古博物館で実施した。主として下記の嘱託員等が整理作業を担当し、発掘調査担当者のうちの博物館所属職員が作業指示等を行い、これに工程管理の職員が加わって実施した。

作業指示担当職員　岸本一宏

作業担当嘱託員等　友久伸子　佐々木誓子（実測、トレース等）

西口由紀　島村順子　荒木由美子（接合・補強、復元）

6．本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影、空中写真は空測会社に委託して撮影したものを使用した。遺物写真は株式会社タニグチ・フォトに委託して撮影したものを使用した。

7．本書の執筆は、県立考古博物館所属の山本誠（石器部分）および発掘調査担当者である岸本がおこない、編集は友久・佐々木両嘱託員の補助のもと、岸本がおこなった。

8．本報告で使用した図面・写真および遺物は、兵庫県立考古博物館および魚住分館で保管している。

9．本書で使用した方位は第Ⅴ系国土座標（世界測地系）を基準とし、北は座標北をさす。標高の数値は国土地理院１等水準点を利用した海抜高（T.P.）を使用した。

10．遺構名の略号は、土壙は「ＳＫ」、溝は「ＳＤ」、柵列は「SA」、柱穴は「Ｐ」を使用した。

11．土層断面図の色調名および土器の色調名は「新版標準土色帳」（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものである。

12．遺物番号は本文・図版・写真図版とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。また、須恵器は断面黒塗り、その他は白抜きとしている。

13．発掘調査にあたり、加東市教育委員会の森下大輔氏から多大なる御協力を得た。記して感謝の意を表します。

本 文 目 次

第１章　遺跡の環境と調査の経緯・経過
　第１節　遺跡の環境
　　１．遺跡の位置 …… 1
　　２．地理的環境 …… 1
　　３．歴史的環境 …… 4
　第２節　調査の経緯・経過
　　１．発掘調査
　　（１）確認調査 …… 7
　　（２）本発掘調査 …… 7
　　２．出土品整理 …… 8
第２章　調査の結果
　第１節　概要
　　１．基本層序 …… 9
　　２．検出遺構 …… 9
　　３．出土遺物 …… 10
　　４．小　結 …… 10
　第２節　遺構
　　１．弥生時代 …… 11
　　２．中　世 …… 12
　　３．近　世 …… 12
　　４．時期不明の遺構 …… 12
　第３節　出土遺物
　　１．遺構出土遺物
　　（１）弥生時代 …… 13
　　（２）中　世 …… 14
　　（３）近　世 …… 14
　　２．包含層出土遺物
　　（１）弥生時代 …… 15
　　（２）奈良時代 …… 15
　　（３）平安時代～鎌倉時代 …… 16
　　（４）室町時代 …… 16
　　（５）近世以降 …… 16
第３章　総　括 …… 17

挿図目次

第１図　遺跡周辺の地形 …… 3
第２図　周辺の遺跡 …… 5
第３図　欅列ＳＡ01 …… 12

図版目次

図版１　確認調査・本発掘調査区位置
図版２　本発掘調査区検出遺構全体
図版３　土層断面
図版４　遺構集中部平面
図版５　土壙・溝
図版６　土壙・柱穴・包含層出土弥生土器
図版７　土壙・包含層出土石器
図版８　溝・井戸出土土器類
図版９　包含層出土土器類

写真図版目次

写真図版１　上　遺跡遠景（北から）
　　下　遺跡遠景（南から）
写真図版２　上　遺跡遠景（西から）
　　下　松尾（宝塚）古墳（北から）
写真図版３　　調査区全景（空中写真・西から）
写真図版４　上　調査区全景（東から）
　　下　調査区全景（西から）
写真図版５　上　調査区中央遺構集中部（東から）
　　下　調査区中央遺構集中部（南西から）
写真図版６　①　東壁（北端）土層断面（西から）
　　②　東壁（中央北部）土層断面（西から）
　　③　東壁（南部）土層断面（西から）
　　④　東壁（南端）土層断面（西から）
　　⑤　ＳＫ01埋土断面（南から）
　　⑥　ＳＫ02埋土断面（北から）
　　⑦　ＳＫ03埋土断面（南東から）
　　⑧　ＳＫ04埋土断面（南東から）
写真図版７　①　ＳＫ05埋土断面（南東から）
　　②　ＳＫ06埋土断面（東から）
　　③　ＳＫ07埋土断面（南西から）
　　④　Ｐ01土器出土状況（南から）
　　⑤　ＳＤ01埋土断面（南から）
　　⑥　作業風景（南東から）
　　⑦　作業風景（東から）
　　⑧　調査区およびその周辺（西から）
写真図版８　上　土壙・柱穴出土土器
　　下　土壙・柱穴・包含層出土土器
写真図版９　上　溝・井戸出土土器類（内面）
　　下　溝・井戸出土土器類（外面）
写真図版10　上　包含層出土須恵器（内面）
　　下　包含層出土須恵器（外面）
写真図版11　上　包含層出土須恵器
　　下　包含層出土土器類
写真図版12　上　出土石器
　　下　出土金属製品・二銭銅貨

第１章　遺跡の環境と調査の経緯・経過

第１節　遺跡の環境

１．遺跡の位置

田中・蓼原遺跡が位置する加東市は兵庫県中央部やや南寄りに位置し、北側は西脇市、南側は小野市、三木市、西側は加西市、東側は篠山市、三田市と接しており、総面積は 157.49 ㎢の加古川中流域に位置する自治体である。加東市は旧国名では兵庫県の南部である「播磨国」にあたり、播磨地域を東西に分けた場合の東播磨、播磨をさらに細分した場合には北播磨に含まれる。

平成 18 年３月に旧加東郡の滝野・社・東条の３町がそのまま合併して誕生した、人口約４万人（平成 19 年２月現在）の新市であり、田中・蓼原遺跡が位置するのは旧社町域であるが、現在は町名を冠さずに加東市田中と呼称されている。

交通網としては、加東市の中央部を東西方向に国土幹線である中国自動車道が走り、ひょうご東条インターチェンジと滝野社インターチェンジの二つの玄関口を有し、阪神地域と直結している。また、兵庫県の幹線道路である国道 175 号線や県道市場－滝野線が南北にのび、国道 372 号線が東西をつないでいることから物流の拠点となっているなど、兵庫県下でも交通アクセスが良好な地域となっている。

一方、加東市の西部にはＪＲ加古川線が南北に通っており、南は山陽本線加古川駅と結ばれている。近年、電化や沿線地域の環境向上も図られ、通勤・通学に活用されている。

田中・蓼原遺跡が位置するのは加東市の社市街地の西南西で、田中集落の南西端にあたり、西側には社工業団地が存在している。

２．地理的環境

加東市は、北部から北東部にかけて、中国山地の支脈がのび、これらに連なって御岳山、三草山、五峰山などの山塊が存在している。

加東市の気候は、瀬戸内型気候の特色を備えており、四季を通じて比較的温暖な気候となっている。また、台風や降雪による災害も少なく、瀬戸内海沿岸部にくらべて年間平均気温は若干低くなっているが、降水量はやや多くなっている。

加東市の西部には、播磨最大の河川である加古川が南流し、各小河川が加古川に合流している。加東市域に存在する加古川の支流には、東条川、出水川、千鳥川、吉馬川、油谷川などがあり、それらは地域を潤しながら流れている。同時に、加東市域には段丘が発達しており、中位段丘が大半を占めるが、高位段丘も谷奥では認められる。それらは、加古川などの河川に沿って河岸段丘と沖積平野が形成されたもので、南部には皚野台地、加古川西岸には青野ヶ原の丘陵地がひろがっている。

また、多数のため池が築造されており、農業用水として活用されるとともに、自然環境との接点として幾多の生物に生息の場を与えている。加東市の北東部地域一帯は清水・東条湖・立杭県立自然公園に指定されており、野鳥の生息地でもある。

ため池は平野部の水田中にも多く存在している。現在は一帯が水田となって平面的になっているが、もとは段丘面上も含んでおり、河川の水位よりも高い台地が多かったものと判断される。したがって、旧地形ではもともと起伏があり、台地上部分では河川のみでは水田を営むことができなかったため、旧地形に存在した谷部をせき止めてため池を構築し、水位を上げることによって水田に引く水を確保した

ものと推定される。つまり、加東市域の平野部に存在するこれらの多くのため池の存在は、この平野部はもともと台地部分を多く含む起伏のある地形であったことを示しており、その土地を水田として利用するために築造されたものであったと考えられよう。

田中・蓼原遺跡が存在する周辺においても、北側には千鳥川、南側には東条川が西流しており、その間には大きな河川は認められない。千鳥川は加東市東条から藤田を経て木梨で三草川と合流し、家原・窪田集落の北側を西流して加古川と合流している。一方、東条川は篠山市今田町に源を発し、加東市の東条より小野市の北端部に接しながら屋度・東古瀬を経て西流し、小野市喜多町・高田町で加古川と合流する。これらの千鳥川・東条川の流域は大きな谷状地形となっており、川の両岸には河川によって形成された段丘が発達している。

田中・蓼原遺跡は千鳥川・東条川に挟まれた部分にあたり、標高は 45 mで、地形的には加古川の東岸に形成された沖積平野、低位段丘部分にあたる。

千鳥川・東条川の両河川に挟まれた部分のうち、田中・蓼原遺跡の周辺では、社市街地から沢部集落まで中位段丘と低位段丘との境にあたる段丘崖が認められる。この段丘崖は比高差 10 m前後となっており、これらは加古川を主とした浸食作用によって形成されたと推定される。また、この段丘崖は沢部集落から南東側へも続くが、この方向の段丘崖については、東条川の浸食によるものと思われる。

千鳥川・東条川の両河川に挟まれた地域には大きな河川は認められないものの、社市街地と松尾・山国集落の間には、中位段丘を分断するかたちで西に開析する小さな谷が認められ、松尾集落とその南側の東実集落との間にも同様の小さな谷が存在している。その小谷にはそれぞれ下川・出水川が西流している。また、谷地形と台地を逆にみれば、巨視的には東部にひろがる台地から、ゆるやかな尾根が西方に派生した状態ととらえることができよう。

社市街地や松尾・山国・東実などの各集落は中位段丘上に立地している一方で、田中・出水などの集落はそれよりも低い部分に存在している。田中・出水の両集落が立地しているのは、低位段丘上と推定することができる。ただし、この段丘は現在その姿を見ることができず、すでに加古川およびその支流による沖積作用によって埋没してしまっているものと思われる。

それらを小河川や段丘地形などとあわせて考えると、田中集落の北東部にはため池が存在しており、さらにその東側では、社市街地の南側にある中位段丘に入り込んだ小さな谷が認められる。また、田中集落の南東側にも今池が存在し、松尾集落の北側には小さな谷の存在が認められると同時に小さなため池が存在している。このことから田中集落は、社市街地の南側と松尾集落の北側にそれぞれ存在する、小さな谷に挟まれた尾根の西側延長線上に立地していると推定することができよう。ただし、中位段丘と田中集落が立地する部分との中間部については浸食されたものと思われ、そのことによって田中集落が立地する部分が島状に残った可能性を推定することができよう。

同時に、田中集落の南側に位置する出水集落が立地する部分についても、東実の集落が存在する中位段丘からのびた尾根の続きの部分ととらえることができ、出水川が南西方向に流れる部分が浸食によって分断されたかたちになっていると理解できるであろう。

同様に、田中集落の北側に存在する鳥居集落にいたっては、もともと社市街地が立地する中位段丘が続いていた部分と推定されるが、浸食後には 700 mに近い間隔が空いてしまったと想像することもできる。

このように、田中集落などが存在する部分はもともと中位段丘の尾根の続きであった、埋没した低位

第１図　遺跡周辺の地形（1970 年測量）

段丘上と判断することができるが、中位段丘のように主として東西方向に安定的にのびているとは限らず、北方向や南方向から東西ラインが歪められていると同時に、南北方向の分断も多数の箇所で想定されよう。

田中・蓼原遺跡や社・大塚遺跡といった弥生時代前期末頃から中期初頭の遺跡のうち、平地に位置するものについては、こうした中位段丘の尾根の続きである低位段丘上に立地しているものと思われ、弥生時代中期後半以降の田中・両部遺跡や松尾・山西遺跡、出水・前畑ヶ遺跡においても、同様の地形に立地していると考えることができよう。

3．歴史的環境

田中・蓼原遺跡が所在する加東市内の旧社町域には、旧石器時代や縄紋時代の遺跡で確認されたものは少ないが、縄紋晩期には旧滝野町域の河高にある河高・平田遺跡や河高・溝ノ越遺跡で後期の土器が、同じく河高にある樋詰古墳の墳丘からは晩期の土器が出土している。

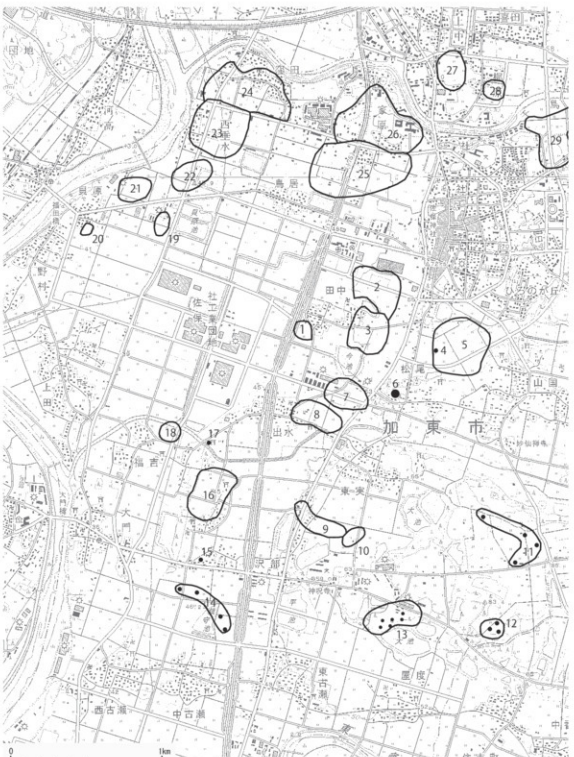
今回の田中・蓼原遺跡（1）の調査区では、弥生時代前期後半～中期初頭の遺構が検出されたが、北東側約500mには同時期の遺跡として社・大塚遺跡（2）が存在している。社・大塚遺跡では前期の溝や中期初頭の土壙が調査されており、そこから流水文が描かれた壺も出土している。ほかに弥生時代前期後半頃からはじまる遺跡として、加古川西岸では河高地区の河高・平田遺跡や河高・上ノ池遺跡があり、加古川東岸では窪田・前田遺跡（24）や西垂水・観音寺遺跡（23）があげられる。これらの遺跡では、小規模ながら小さな谷地形内のグライ土壌部分を耕作地にしていたものと思われる。

弥生時代中期中葉には、窪田・前田遺跡（24）や社・大塚遺跡（2）で中期中葉にいたっても継続して営まれており、ほかに、家原・南田遺跡（25）では溝が検出されており、その北側の家原・堂ノ元遺跡（26）は中期末からはじまる。田中・両部遺跡（3）や松尾・山西遺跡（7）、出水・前畑ヶ遺跡（16）も中期にはじまる遺跡のようである。これら弥生時代前期末頃～中期の遺跡は埋没した低位段丘上に立地しているものと推定されるが、この段丘は中位段丘から尾根状にのびた部分にあたると想定される。なお、中位段丘上に立地する山国・源ヶ坂遺跡（5）では中期後半の土壙が検出されている。

弥生時代後期の遺跡のうち、社・大塚遺跡（2）では六角形に近い平面形の竪穴住居跡が検出されていることから、この時期にも集落は継続しており、平面五角形のほか2棟の竪穴住居跡が調査された出水・前畑ヶ遺跡（16）も継続しているようである。社・大塚遺跡では住居跡から土器のほか鉄器や砥石が出土している。また、家原・堂ノ元遺跡（26）では後期に環濠状の溝をめぐらせており、後期後半の竪穴住居跡が3棟検出されている。一方、竪穴住居跡や土壙が検出された西垂水・東下り遺跡（22）や貝原・町田遺跡（21）は新たに営まれる遺跡であろう。後期の遺跡としては、ほかに出水・神田遺跡（8）があげられる。

弥生時代後期末には南塩田遺跡（20）で方形住居跡、福吉・新池遺跡（18）では後期末～古墳時代前期の溝が検出されており、木梨・西ノ原遺跡（29）もその時期と思われる。

続く古墳時代では、前期の遺跡は不明確であるが、田中・蓼原遺跡の東方約800mの段丘上には、中期の大型円墳である松尾（宝塚）古墳（6）（写真図版2下）が存在している。松尾古墳は直径約40m、高さ約5mで、幅約6mの周濠または周溝を有している。松尾古墳では埴輪が存在したとされているが、確認できていないものの、墳丘には葺石の存在が確認できる。松尾古墳のような規模を有する古墳の被葬者は、例えば旧社町域の平野部全体といった、ある程度の広域を治めた首長と推定することができよう。



1 田中・夢原遺跡
2 社・大塚遺跡
3 田中・国郡遺跡
4 山国・頭ヶ坂古墳
5 山国・頭ヶ坂遺跡
6 松尾（宝塚）古墳
7 松尾・山西遺跡
8 出水・神田遺跡
9 南坊古墳群
10 阿弥陀堂北遺跡
11 山国・南山古墳群
12 屋度・北山古墳群
13 屋度古墳群
14 沢部古墳群
15 沢部・南開地古墳
16 出水・前畑ヶ遺跡
17 出水古墳
18 福吉・新池遺跡
19 貝原・小池遺跡
20 南塩田遺跡
21 貝原・町田遺跡
22 西垂水・東下り遺跡
23 西垂水・観音寺遺跡
24 屋田・前田遺跡
25 家原・南田遺跡
26 家原・堂ノ元遺跡
27 梶原・西畑遺跡
28 梶原・大道遺跡
29 木梨・西ノ原遺跡

第２図　周辺の遺跡（弥生～古墳時代）

松尾古墳が立地するのは中位段丘とされているが、周辺に存在する山国・源ヶ坂古墳（径約20ｍ、周溝幅３ｍ）（４）や南坊古墳群（９）、山国･南山古墳群（11）、屋度古墳群（13）、屋度･北山古墳群（12）も中位段丘の縁辺付近に主として築造されている。山国・源ヶ坂古墳（４）は６世紀後半頃の所産と思われるが、直径15ｍ、高さ２ｍ、周溝幅２～３ｍの南坊２号墳（狐塚）（９）では円筒埴輪や朝顔形埴輪とともにＴＫ47型式期の須恵器が出土しており、直径28ｍ、高さ４ｍの南坊１号墳（五郎塚）（９）とともに中期末～後期初頭の時期が与えられよう。また、面径14.3㎝の神獣鏡や算盤玉形紡錘車などが出土した山国・南山２号墳（11）はやや遡る可能性が高い。なお、ＴＫ47型式期の須恵器が出土した阿弥陀堂北遺跡（10）トレンチ６の落ち込みは、古墳の周溝の一部である可能性も考えられよう。これら中位段丘上に築造された古墳は中期後半以降、古墳時代後期後半まで営まれたようである。一方、直径29ｍ、高さ2.3ｍで埴輪が出土した出水古墳（17）や、同じく埴輪が出土している沢部・南開地古墳（15）、４基で構成される沢部古墳群（14）は埋没している低位段丘上に築造されたものと判断されており、低位段丘上では後期中葉以降には古墳は築造されていない可能性が高い。ただし、これらの古墳は後世の開発により削平されたものが多く、現存しているものは少ない。

これらの古墳群を営んだと考えられる集落のうち、内容が明らかな山国・源ヶ坂遺跡（５）では古墳時代後期～末の竪穴住居跡12棟と掘立柱建物跡３棟が調査されている。また、近隣の社・大塚遺跡（２）、田中・両部遺跡（３）、松尾・山西遺跡（７）、出水・前畑ヶ遺跡（16）も古墳時代に継続しているが、不明な点が多い。一方、古墳群とは離れた位置にある家原・堂ノ元遺跡（26）では、古墳時代中期後半～後期末の21棟もの竪穴住居跡が調査されている。また、千鳥川北岸に位置する梶原・大道遺跡（28）では古墳時代後期の掘立柱建物跡が確認され、梶原・西畑遺跡（27）では古墳時代の竪穴住居跡も検出されている。そのほか詳細時期は不明であるが、窪田・前田遺跡（24）や西垂水・観音寺遺跡（23）、家原・南田遺跡（25）も古墳時代の遺跡である。

参考文献

『狐塚古墳』加東郡埋蔵文化財ニュース３　加東郡教育委員会　1982年
『家原・堂ノ元遺跡』加東郡埋蔵文化財報告５　加東郡教育委員会　1984年
『埋蔵文化財調査年報　1987年度』加東郡埋蔵文化財報告９　加東郡教育委員会　1989年
『山国・源ヶ坂遺跡』加東郡埋蔵文化財報告10　加東郡教育委員会　1990年
『埋蔵文化財調査年報（1991年度）』加東郡埋蔵文化財報告15　加東郡教育委員会　1994年
『河高・上ノ池遺跡』加東郡埋蔵文化財報告19　加東郡教育委員会　1997年
『北野・黒深遺跡／北野・神田木遺跡』加東郡埋蔵文化財報告24　加東郡教育委員会　1999年
「南塩田遺跡」『平成18年度　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　年報』兵庫県立考古博物館　2007年

第２節　調査の経緯・経過

１．発掘調査

兵庫県北播磨県民局県土整備部社土木事務所（当時）が国道372号線社バイパス建設を進めている、地域連携事業（道路改築）（当時）の用地内には、「田中・両部遺跡（遺跡番号230079）」が存在していることから、兵庫県教育委員会では遺跡の詳細な範囲や性格等を確認するための調査を平成18年度に実施した。その結果、田中・両部遺跡の範囲よりもさらに西方の部分において遺構・遺物が検出されたことから、加東市教育委員会と協議して「田中・蓼原遺跡（遺跡番号230462）」という名称で埋蔵文化財包蔵地として登録された。

その後、社土木事務所と協議した結果、田中・蓼原遺跡のうち、遺構・遺物が検出された道路用地内600㎡の範囲について記録保存を前提とした本発掘調査を平成20年度に実施することとなった。

なお、発掘調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および兵庫県立考古博物館が実施した。

（１）確認調査　（図版１）

平成18年度の確認調査は、平成19年１月９日～31日までの期間に田中・両部遺跡の名称で代表させて実施した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の西口和彦および中川渉が担当した。また、兵庫県教育委員会が設定した遺跡調査番号は2006146である。

この確認調査においては、トレンチ24箇所を設定して掘削した結果、調査対象地区の西端部にある田中集落南西側において、遺構・遺物が検出された。遺構が検出されたトレンチはTr30・31の２箇所で、Tr30では２×１ｍの不整形な土壙と直径30㎝の柱穴２箇所および小ピット数箇所、Tr31では直径30㎝の柱穴１箇所と小ピット数箇所を検出し、Tr30・31ではともに遺物包含層が認められた。遺物包含層や土壙上面からは弥生時代中期の土器片多数や石鏃・石錐を含むサヌカイト製の石器が出土した。

また、遺構のひろがりを確認するため、Tr29とTr30の間にTr30-2、Tr31とTr32の間にTr31-2をそれぞれ追加設定して調査した結果、遺構は認められなかったものの、遺物包含層と遺構面が続いて存在していることが確認できた。

なお、この地区の東部にあたるTr28・29では、地表下35～65㎝の暗褐色～黒褐色シルト層から古代～中世の土器が出土したが、その下層にあたる浅黄色シルト層は非常に軟弱で、上面からの踏み込みの痕跡が顕著であった。この地区の西端にあたるTr32では、地表下35㎝で明黄褐色の礫まじりシルト層になっており、遺構・遺物はともに認められなかった。

以上の確認調査の結果をもとに社土木事務所と協議した結果、遺構および遺物包含層が検出された範囲について本発掘調査を実施することとなった。その範囲は、東西両端については確認調査で遺物包含層と遺構面が確認されたTr30-2とTr31-2の間にあたり、面積は600㎡である。

（２）本発掘調査　（図版１・２、写真図版３）

平成20年度の本発掘調査は600㎡であり、平成21年１月16日～３月３日までの約１ヶ月半にわたって実施した。調査は、平成19年度の組織改変に伴って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が兵庫県立考古博物館の埋蔵文化財調査部となっていたことから、同館調査第２班の岸本一宏および織英記が担当した。兵庫県教育委員会が設定した遺跡調査番号は2008190である。

本発掘調査は国道372号線社バイパス建設による記録保存を前提としたものであることから、北播磨県民局長からの依頼により実施した。なお、平成20年度の開発事業名は交通円滑化事業（道路改築）であった。

田中・蓼原遺跡の本発掘調査地点は、調査直前まで水田耕作地であったが、交通円滑化事業の本体工事施工の際に耕土をあらかじめ除去したうえ、調査地点の中央部には東西方向の仮設道が敷設されていた。

調査の方法は、本体工事仮設道および床土については機械掘削により除去した。その後、遺物包含層を人力により慎重に掘り下げ、遺物の検出につとめた。遺物包含層除去後には、その下面にある基盤面上において遺構検出作業を実施して遺構を確認した。遺構確認後は個別遺構の掘削・埋土土層断面実測および写真撮影を実施し、遺構全体の測量については2月18日に航空写真測量を行なった。また、2月28日には地元住民を対象とした現地説明会を実施した。

調査の結果、弥生時代前期末頃～中期初頭の遺物とその時期と思われる土壙7基、当該時期の可能性のある柱穴多数を検出した。また、詳細時期不明の柱穴のほか、近世と思われる井戸・溝などがある。弥生時代以外の遺物には奈良時代・平安時代～鎌倉時代・室町時代の土器類があり、奈良時代の遺構は確認できなかったものの、付近には当該時期の遺構も存在している可能性が高いものと思われた。

2．出土品整理

出土品整理および報告書作成は、遺跡や遺物の記録を残すための作業であり、土器などの破片の接合、接合した土器の空間を埋める補強や復元、土器・石器の原寸大の実測、遺物実測図や遺構図の浄写であるトレース、トレース図を印刷用の版下にするためのレイアウト、遺物の写真撮影、自然科学的な分析などのほか、原稿執筆がある。

田中・蓼原遺跡の出土品整理および報告書作成は、平成21・22年度に兵庫県立考古博物館において実施した。また、発掘調査と同様に、出土品整理においても開発事業者である北播磨県民局長からの依頼によるものである。

なお、開発事業者は社土木事務所から加東土木事務所に名称変更となり、開発事業名も最終的には地域連携推進事業となった。

出土品整理は兵庫県立考古博物館の岸本一宏と山本誠および嘱託職員が担当した。嘱託職員は遺物の水洗い、接合・補強、実測、復元、遺物・遺構トレース、レイアウトなどを担当し、山本は石器関係の実測図チェックおよび写真レイアウトと原稿執筆をおこなった。

遺物の接合・補強と復元は西口由紀・島村順子・荒木由美子が行い、遺物実測と遺物・遺構トレースおよび遺物図・遺構図・写真のレイアウトは友久伸子と佐々木誓子がおこなった。金属器保存処理については考古博物館の岡本一秀の指導のもと、長濱重美がおこなった。

また、上記以外の実測図チェックと遺物図レイアウト案、遺構トレース原図作成および遺構・遺物の原稿執筆は岸本がおこなった。

出土品整理作業のうち、水洗い、接合・補強、実測、復元、写真撮影、写真整理、金属器保存処理については平成21年度に、遺構図補正、遺物・遺構トレース、レイアウトは平成22年度に実施した。

なお、遺物写真については株式会社タニグチ・フォトに委託して兵庫県立考古博物館において撮影した。

第２章　調査の結果

第１節　概　要

調査地点の現状は、圃場整備が完了した水田２筆分であり、落差約 30 ㎝で東が高く西が低い地形となっていた。また、調査時点では東側で国道 372 号線社バイパスの本体工事施工を実施するため、耕土をあらかじめ除去し、調査地点の中央部に東西方向の仮設道が敷設されていた。

このように、旧地形はかなり改変を受けていたものの、調査を進めてゆくうちに、調査区南側の約４分の１は一段低くなって溝状の落ち込みがあり、それを埋めて水田を営んでいたことが判明し、圃場整備がおこなわれる前には計４筆の水田であったことが推定できた。また、調査区南側の低い部分を除いて、東西方向については、水田による段差構築の影響は、遺構面にはほとんど認められなかった。

１．基本層序（図版３、写真図版６）

調査開始時には耕土が除去されており、一部に工事用仮設道の盛土が認められたが、調査区のほぼ全体には第３層である圃場整備時の盛土が覆っていた。その下層には第４層である圃場整備前の耕土が認められたが、調査区南西部に限られていた。また、その部分の下層には圃場整備前水田よりも前の旧耕土と思われる黄灰色粗砂混じりシルト（第６層）が認められた。

調査区南東部に限られた範囲内には、流路跡のようにもみえる南側下段部分の埋土として、第５層およびその下層に第７層が堆積していた。第５層には少量の土器を含んでおり、上層包含層である第８層の二次堆積と想定している。

第８層には鎌倉時代から江戸時代までの遺物を含んでおり、灰黄褐色を呈していた。調査時には上層包含層として遺物を取りあげた。この層は基本的には調査区北半部である上段に限られ、ほぼ東半分に認められた。ただし、西半部に存在した第９層暗灰黄褐色シルトも基本的には上層包含層であると認識している。

第 11 層は暗褐色粗砂混じりの粘質シルトで、堆積範囲は調査区東部の第８層直下にあたるが、その残存部分は少ない。また、調査区南東部ではその下層にある地山面との境界面に凹凸が多く認められた。この層中には弥生時代～平安時代の遺物を含んでいたことから、調査時に遺物を取りあげる際には下層包含層とした。

第 15 層である地山には遺物をまったく含んでおらず、遺構面となっていた。ほぼすべての遺構はこの面で検出した。明黄褐色～灰黄色を呈する粘質シルトであるが、調査区北半部の方が黄色味の強い色調で、土中に含まれる鉄分の酸化が進んでいるものと判断される。一方、調査区南半部においては湿地に近い状態であったことから酸化がそれほど進行していないためと思われる。

２．検出遺構（図版２、写真図版３・４）

遺構はすべて地山である明黄褐色シルト上で検出した。検出した遺構内に溜まっていた土層は、灰色細砂と暗褐色シルトの２種類に大きく分けることができた。

検出した遺構の種類には、柱穴・土壙・溝・井戸がある。このうち、水田を東西に分かつ溝とそれにつながった溜井戸の両者が灰色細砂で埋まった遺構であり、時期的には古く考えても江戸時代のものではないかと思われる。また、調査区南側の一段低くなった部分にも溝があり、少量ではあるが平安時代

から鎌倉時代以降の土器が出土している。

柱穴と土壙は調査区の中央東寄りの一番高い場所を中心に分布しており、暗褐色シルトで埋まっていた。土壙は直径１ｍ程度の楕円形を呈するものが多く、一定の間隔をおいて分布している。柱穴掘形は直径 20 ～ 40 ㎝程度で、柱穴の密集度は高く、一部で柱穴どうしや土壙との重複も認められる。柱穴・土壙とも検出面から底までの深さが比較的浅く、遺構が営まれた当時の地表面は後世の削平を受けているものと思われる。

柱穴・土壙の一部からは弥生時代前期末～中期初頭の甕・壺などの土器片のほか、サヌカイト細片や石鏃が出土している。また、下層包含層からも石斧や石鏃が出土していることもあわせて、これらの遺構群が弥生時代前期末から中期初頭の竪穴住居跡や掘立柱建物跡の一部である可能性がある。

なお、確認調査時にＴｒ30 で検出された土壙は、本発掘調査のＳＫ 03 であると判断される。

３．出土遺物（図版６～９、写真図版８～ 12）

出土遺物の大半は土器類であるが、数点の石器と金属器がある。それらは遺構および遺物包含層などから出土しており、時期的には弥生時代前期末頃～中期初頭、奈良時代、平安時代後半～鎌倉時代、室町時代、近世および近世以降にわたっている。

弥生時代前期末頃～中期初頭の遺物には土器のほかに石鏃や石錐・石斧などの石器類があり、大半が土壙や柱穴から出土したものである。また、確認調査時にも包含層や土壙上面から土器・石器が出土している。弥生時代前期末頃～中期初頭の土器には壺・甕を中心に鉢も認められる。甕の外面には３条以上の沈線文を施しており、如意形の口縁部や逆Ｌ字に近い形態の口縁部も認められる。壺には沈線文が残存していないが、頸部に多条の貼付突帯を有するものや櫛描で施文した小型の壺のほか、広口壺の破片なども認められる。打製石器では、縄紋時代からの古相を示す特徴を有しているものが多い。

奈良時代の土器は包含層から出土したものに限られる。奈良時代前半に属する可能性が高いものが多く、飛鳥時代に遡ると思われるものも認められる。

平安時代後半～鎌倉時代の土器は溝および包含層から出土している。11 世紀に遡ると考えられるものから、鎌倉時代末頃のものまで認められ、器種も多岐におよぶ。溝埋土からもこの時期の土器が出土しているが、溝の時期は室町時代以降と判断するほうがよいように思われる。

室町時代の土器類には須恵器・土師器のほか、国産陶器が認められるが、１点が溝から出土している以外はすべて包含層に含まれていたものである。

近世以降の遺物には土器類のほかに煙管と古銭がある。土器類には輸入陶磁器・国産陶磁器・土師器・瓦があり、井戸ＳＥ 01 埋土から出土したものが多くを占め、近世初期に属するものが多い。なお、古銭は二銭銅貨である。

４．小　結

今回の調査では、弥生時代前期末頃～中期初頭の集落跡の可能性がある遺構群を発見するとともに、弥生時代から江戸時代以降までの遺物が出土した。調査地点の北東には弥生時代前期から後期まで継続する、弥生時代の中心的集落である社・大塚遺跡が存在する。今回の調査によって、弥生時代の早い段階の居住範囲が、これまで想定されていた範囲を超えて、広範囲にひろがっていたことが判明した。

第２節　遺　構

１．弥生時代

弥生時代の遺構と考えられるものには土壙や柱穴があり、調査区の東半部分で集中的に認められた。弥生時代の遺物が出土している土壙が多いことから、土壙についてはすべて弥生時代に属する可能性が高いと思われるが、柱穴から出土した遺物はすべて弥生時代に属するものの、一部の柱穴に限られることから、すべての柱穴が弥生時代に属するとの判断はできなかった。

（１）土　壙（図版４・５、写真図版６・７）

主壙は７基検出した。

ＳＫ01　検出した土壙群の東端に位置するものである。一辺約90㎝の矩形に近い平面形を呈する土壙で、検出面からの深さは15㎝である。底部の形状は皿状に近く、暗褐色や黒褐色のシルトが堆積していた。埋土中より土器片が出土したが、細片のため図示できなかった。

ＳＫ02　土壙群東部でＳＫ03の西側約１ｍで検出した、平面楕円形の土壙である。長径約60㎝、短径は約50㎝と比較的小規模なものであるが、検出面からの深さは15㎝を測り、底面は皿状に近い。埋土はＳＫ01と同様である。埋土よりサヌカイト製石鏃（Ｓ１）が出土しているが、土器は図示できなかった。

ＳＫ03　土壙群東部に位置する。平面は卵形に近い楕円形を呈している。長径は約2.0m、短径は1.35ｍと土壙群中最も規模が大きい。埋土は褐色の単一層で、検出面からの深さも８㎝と浅い。柱穴Ｐ03と重複し、本土壙のほうが先行する。埋土から小型壺（１）や甕口縁部（２）および広口壺口縁部（３）が出土している。また、確認調査のＴｒ30がこの位置であることから、Ｔｒ30で検出された土壙は本土壙を指すものと判断できるが、広口壺口縁部（12）・底部（13）は包含層か遺構出土かの判断ができない。

ＳＫ04　土壙群の中央部北端で検出した、円形に近い楕円形を呈する土壙である。長径は南北方向で、約1.20m、短径は約1.0mの規模である。底部は皿状を呈しており、検出面からの深さは10㎝強である。埋土は黒褐色の単一層で、図示できる遺物は出土していない。この土壙の周囲には弥生土器が出土した柱穴（Ｐ06・Ｐ11）が複数存在していたことから、竪穴住居跡の中央土壙の可能性も否定できないが、竪穴住居跡となりうる位置に柱穴がすべて揃っていないことから、判断できなかった。

ＳＫ05　遺構群の中央部に存在している。平面形は長方形に近いが、東側の幅が広く西側が狭い。長辺約1.50mで、短辺は東側では約70㎝、西側では約60㎝である。検出面からの深さは5㎝と浅いが、底面がほぼ平坦である。平面形や規模および底面の形状から、墓である可能性も考えられるが、削平を受けているために残存状況が悪く、土壙の側面の状態が確認できないことから、ここでは判断を保留しておく。また、弥生土器が出土していないことから、弥生時代の遺構ではない可能性も残している。

ＳＫ06　土壙群中央部北端の、ＳＫ04の約90㎝西側で検出した土壙である。平面形は歪んだ楕円形に近く、南北方向の長径は1.30m、北部での短径は約60㎝を測る。検出面からの深さは10㎝で、底面は比較的平坦である。埋土は大半が黒褐色のシルトである。埋土から広口壺口縁部片（４）が出土している。

ＳＫ07　土壙群の西端で、近世と思われる溝ＳＤ01と一部重複して検出した、平面楕円形に近い土壙である。ＳＤ01により北東側の一部が破壊されているが、残存値では長径約1.30m、短径約60㎝を測る。検出面からの深さは５㎝で、底面は比較的平坦であるが、柱穴状のピットを２箇所で検出した。あるいは、土壙ではなく、接する２箇所の柱穴を土壙と判断しているのかもしれない。ただし、埋土は地山土に黒

褐色シルトが混じったもので、土壙ＳＫ01やＳＫ02の埋土下層とほぼ同じであることに加えて、把手付の鉢（５）と思われる弥生土器が出土していることから、時期的には弥生時代と判断できる。

（２）柱　穴　（図版４・５、写真図版５・７－④）

柱穴掘形は直径20～40cm程度で、土層により確認した柱痕は径10～25cm程度の円形を呈している。柱穴の密集度は高く、一部で柱穴どうしや土壙との重複も認められる。ここで柱穴としたなかには、柱穴とは判別しがたいピットや直径が小さい杭穴もある。柱穴・土壙とも検出面から底までの深さが比較的浅く、遺構が営まれた当時の地表面は後世の削平を受けているものと思われる。

遺構集中部東部北端付近にあるＰ06の掘形からは６の如意形口縁の甕や７の甕の底部といった弥生土器、Ｐ06南西側のＰ11の掘形からも弥生土器壺頸部の８が出土し、東端でＳＫ01と重複しているＰ31からも鉢あるいは高杯の９が出土している。これらのことから、遺構集中部に存在する柱穴の多くが弥生時代前期末頃～中期初頭の所産である可能性が高いと判断されよう。

２．中　世

（１）溝　（図版２・４・５、写真図版３～５・７－⑤）

ＳＤ01は検出面での幅約70～90cm、深さ約15cmで、ほぼ南北方向に約11.5mにわたって検出できた。埋土は灰黄褐色で、14の須恵器壺が出土しているが、15の丹波焼擂鉢も出土しており、位置的には南側に存在するＳＥ01につながるように南流しているため、ＳＥ01と同時期の近世初頭である可能性がある。

ＳＤ02は調査区西部南端の下段で検出した、幅30～110cm、深さ５～20cm、長さ約21mの自然流路に近い形態の溝である。西側は調査区外にのびている。埋土からは16・17の東播系須恵器壺が出土した。

ＳＤ03は調査区東端に近い位置に存在する、幅10cm、深さ２cm、長さ4.0mの南北方向に近い小規模な溝である。埋土から、平安時代後期の須恵器鉢口縁部小片の18が出土している。

３．近　世

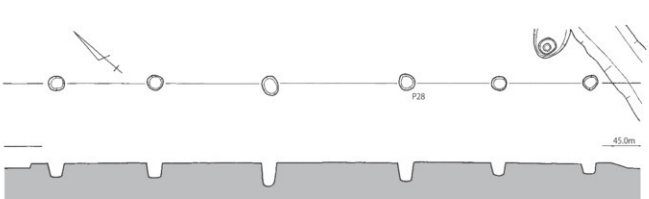
（１）井　戸（ＳＥ01）（図版４、写真図版３～５）

調査区中央部南端に近い部分で検出した、平面楕円形に近い素掘り井戸である。長径約2.0m、短径約1.5m、深さ約70cmで、19～27の近世初頭の陶磁器などが埋土から出土した。

４．時期不明の遺構

（１）柵列跡（ＳＡ01）（第３図、図版２、写真図版３・４）

調査区西部に存在する、北西－南東方向の５間の柵列である。柱間は1.2～1.9mで一定しない。総長は8.75mであるが、さらにのびる可能性がある。Ｐ28から土器小片が出土したが、時期不明である。



第３図　柵列ＳＡ01

第３節　出土遺物

１．遺構出土遺物

（１）弥生時代

遺構から出土した遺物のうち、弥生時代に属するものには壺や甕といった土器のほか、サヌカイト製石鏃やサヌカイト剥片がある。

土　器（図版６－１～９、写真図版８）

１はＳＫ03より出土した、口縁端部を欠失する小型壺である。体部も全体の３分の１程度しか遺存していないが、図上ではほぼ完形に近い状態である。底径4.2㎝とやや大きくて厚い底部から外上方にのびてやや胴の張った体部をもつ。体部最大径は7.2㎝を測る。口縁部は体部からすぼまったのち外反しているが、短くおさまるものと思われる。推定による口径は4.0㎝、器高は8.7㎝と推定される。外面上半部には施文がみられ、頸部にはヘラによる沈線が３条ほどこされ、その下部には山形文に近い文様と直線文、小型の山形文と続けて施文されている。これらの文様は２条一単位を原則としていることから、原体は半截竹管であったと推定される。

２はＳＫ03から出土した甕口縁部である。断面は逆「Ｌ」字形となるが、屈曲部には丸みがある。口縁部直下の体部外面には２条以上のヘラ描沈線文がかろうじて残存している。口縁部は水平に近くのび、端部は丸くおさめている。細片のため口径は不明である。

３は広口壺の口縁端部付近と思われる。外反気味に外上方にのび、端部はやや丸みをもつ。器表の残存状況が悪いため、調整は不明であり、細片のため口径も不明となっている。ＳＫ03から出土した。

４はＳＫ06から出土した広口壺口縁部と思われる小片である。３と同様の形状を呈し、口縁端部は丸みをもつ。器表が荒れているため調整痕は残っていない。小片のため口径も不明である。

５は把手付の鉢と思われる体部片である。ＳＫ07から出土した。把手は水平方向に貼り付けられたものであるが、把手基部付近しか遺存していない。

６は柱穴Ｐ06の掘形から出土した如意形口縁の甕である。体部中位以上は径を測ることができたが、体部下半は欠失している。同じ柱穴から出土した７が同一個体である可能性があるものの、接合することができなかった。口径は21.6㎝、体部最大径は20.3㎝を測ることができた。口縁部直下の体部外面にはヘラ描沈線が疎らに３条施されている。体部外面はハケ調整となっており、残存部下半外面には煤や炭化した有機質が付着している。体部内面はナデ調整。

７は外面に縦方向のハケ調整を施す甕の底部である。底径は8.8㎝を測る。内面には土中に含まれる鉄分やマンガンが付着しているため調整痕は確認できない。柱穴Ｐ06から出土したものである。

８はＰ11の掘形から出土した壺頸部である。体部との境に近い部分に断面三角形の突帯を４条以上貼り付けている。頸部上半は欠失しており、最大径は11.8㎝を測る。橙色を呈している。

９は鉢あるいは高杯といった器種と思われるが、器壁が約４㎜と薄い。やや丸味がある体部から大きく外反して、水平よりもやや斜め下方にのびる口縁部を有する。体部と口縁部の境界の内面には断面三角形の突帯を貼り付けている。口縁部上面には沈線あるいは凹線状を呈する窪みがめぐっており、突帯部分も含めて３条認められる。小片のため径を示すことができなかった。柱穴Ｐ31上面から出土しており、浅黄橙色を呈している。器表が荒れているため、調整痕は遺存していない。

以上述べた遺構出土土器は、２・６のように明らかに弥生前期に属すると判断されるものから、８・

9のように中期に降る可能性が高いものまで認められ、1はその過渡期であると想定される。

石　器（図版7－S1、写真図版12）

SK02出土のS1はサヌカイト製の石鏃である。長さ21.8mm・幅14.2mm・厚さ2.9mm・重さ0.7gを計る。サヌカイトは四国（香川県国分台周辺）産と推定でき、風化度合および形態から縄紋時代後期頃に多いものである。

（2）中　世（図版8－14～18、写真図版9）

14はSD01から出土した東播系須恵器壺口縁部小片である。口径は15.8㎝を測る。口縁部内面には凹線状の窪みが認められるが、粘土紐の接合痕であろう。

15もSD01から出土した丹波焼擂鉢片である。口縁端部は内面方向にひきのばして面をつくる。体部上端はやや内湾する。内面にはヘラによる擂目が認められるが、格子状に施している部分が残存している。橙に近い色調を呈し、口径は33.0㎝を測る。16世紀後半～17世紀初頭の所産であろう。

16・17はSD02から出土した東播系須恵器壺の破片である。16は口径13.0㎝を測る口縁部片で、口縁端部は少し角張り気味である。17は底面回転糸切りの底部片である。底径5.0㎝の平高台は全く突出しない。底部中央内面は若干窪んでいる。

18はSD03から出土した須恵器鉢の口縁部小片である。口径は25.5㎝を測り、器壁は8㎜と厚い。東播系のなかでも北播地域に限定される形態と思われ、11世紀～12世紀前半の所産である可能性がある。

（3）近　世（図版8－19～27、写真図版9）

19～27はSE01埋土から出土した陶磁器などである。

19は輸入磁器と思われる皿片である。内面には青花文が施され、外面にも圏線が描かれている。口径は28.9㎝を測る大型品で、17世紀前半と思われる。一部に漆つぎが認められる。

20も磁器皿である。口径14.8㎝、器高2.9㎝を測り、内面に青花文、外面には圏線を描く。径8.3㎝の輪高台はケズリにより露胎となっている。

21は瀬戸の緑釉（銅緑釉）陶器埦である。径4.6㎝の高台部分は露胎となっている。釉の部分は青灰色を呈する。

22～26は丹波焼である。

22は口径23.4㎝の鉢で、口縁端部を肥厚・内傾させており、端部上面には面をもつ。内外面ともロクロ目が顕著である。内面全体から口縁部外面にかけて赤土部を塗布している。

23は灰黄褐色を呈する擂鉢片で、内面には櫛による擂目が認められ、原体は6本以上の単位である。口縁端部は上下に拡張しているが、上部は外方に曲げている。口径は25.6㎝を測り、17世紀前半の備前焼模倣のものと思われる。内面は赤土部塗りとなっている。

24は口縁端部が肥厚しない擂鉢の細片である。内面には3条以上の櫛による擂目が遺存している。口縁部下端外面には指オサエ痕が認められることから、注ぎ口付近の破片と思われる。

25は口縁部が屈曲する鉢の小片である。口縁部は体部から立ち上がったのち外反させ、端部は若干上方に拡張して垂直面をつくりだしている。内外面ともロクロナデ調整である。口径は30.6㎝を測る。橙色を呈している。

26は橙色を呈する鉢片である。体部から外反しながら上方にのびたのち直立する、やや短く厚い口縁部を有する。口径は13.0㎝で、端部は角張り、口縁部内外面に赤土部を塗っている。口縁部下には貼り付けられた把手の基部が遺存している。

27は黒煙しの平瓦片である。一側縁が遺存している。凸面はケズリ、凹面はナデ調整である。厚さは1.9㎝を測る。

2．包含層出土遺物

（1）弥生時代

土　器　（図版6－10～13、写真図版8）

10は広口壺口縁部片で、口径は13.6㎝を測る。口縁端部は直線的に外上方にのび、端部には面をもつ。器表が磨滅しているため、調整痕は遺存していない。

11は底径7.0㎝を測る底部片である。内外面はナデ調整のようであるが、不確実である。

12は壺の口縁部である。確認調査のTr30内の土壙（SK03）上面または包含層から出土したもので、口径は23.8㎝を測る広口壺の口縁部である。器表の磨滅により調整痕は遺存していない。

13は底部で、底径は7.0㎝。確認調査のTr30内の土壙（SK03）上面または包含層から出土したもので、土壙上面出土であれば、12の壺と同様にSK03にあたると思われる。

石　器　（図版7－S2～S7、写真図版12）

暗褐色粘質土から検出したS2はサヌカイト製の石鏃である。長さ30.2mm・幅18.5mm・厚さ3.3mm・重さ1.3gを計る。SK02出土のS1とともにサヌカイトは四国（香川県国分台周辺）産と推定でき、風化度合および形態から縄紋時代後期頃に多い形態である。

包含層から出土したS3もサヌカイト（四国産と推定）製の楔形石器で、長さ31.3mm・幅24.0mm・厚さ4.8mm・重さ4.4gである。風化度合いから推定して、上記石鏃と同じ時期に属しても矛盾がない。

P20の北側約2mの地山直上から出土したS4は、凝灰質砂岩製の太型蛤刃石斧（磨製石斧）の先端部で、弥生時代に属すると考えられる。なお、先端部には細かな連続した使用痕が顕著に認められる。長さ62.5mm・幅59.0mm・厚さ47.9mm・重さ234.7gを計る。

確認調査時にTr30内から出土した石器にはS5～S7の石錐などがあるが、Tr30内の土壙（SK03）上面または包含層のいずれから出土したかの確定ができないことから、包含層出土として扱う。

S5・S6はサヌカイト製の錐、S7はサヌカイト製の削器である。S5は素材剥片を縦長に用いて左側縁は主に腹面側から、右側縁は背腹両面からの調整加工である。S6は素材剥片を横長に用いて左側縁は主に腹面側から、右側縁は背腹両面からの調整により先端部を整形している。S7は横長剥片を素材に用いて、打面側（右側縁）を背腹両面から内湾するように刃部を加工している。

（2）奈良時代　（図版9－28～35、写真図版11）

28・29は須恵器蓋の破片である。口径は28が15.8㎝、29は16.3㎝を測る。口縁端部は29が下方に拡張するのに対し、28では拡張せずに凹面を呈するのみであることから飛鳥時代に遡る可能性がある。

30は坏Aの破片と思われるが、口径が小さく比較的深い器形であることから、埦Aに含まれるかもしれない。口径9.5㎝、器高3.8㎝で、底径は6.0㎝を測る。底部外面はヘラ切り後ナデを施している。

31は須恵器の瓶あるいは広口壺の口縁部片である。口径は14.8㎝とやや大きい。平瓶の可能性が高い。

32は須恵器で短頸の壺片である。口径は9.7㎝で、頸部は短く、口縁端部には内傾する面をもつ。体部内面にはシボリ目が残存している。奈良時代前半の可能性がある。

33・34は貼付高台を有する須恵器底部片である。ともに坏Bか皿の可能性があり、高台径はそれぞれ8.6㎝、13.6㎝を測る。35は須恵器の壺と思われ、高台部分が剥離している。

（3）平安時代～鎌倉時代　（図版9－36～49、写真図版10・11）

36～39は須恵器塊の口縁部で、40～44は須恵器塊の底部である。口径は順に12.3㎝、14.6㎝、15.8㎝、15.2㎝である。口縁部の形状は、36は外反、37は内湾し、38・39はともに直線的であるが、38の端部は尖り気味で、39は丸くおさめている。口径が小さく深みがある36が最も古い形態と思われ、11世紀の可能性がある。37も深みのある形態であるが、36よりも後出と思われる。38・39は体部の形態から12世紀以降の所産である可能性が高い。底部は平高台をもつ40～43と高台がない44がある。高台部では高い40・42と低い41・43があるが、高い40と低い41の内面底部は体部との境に大きな段を有している。なお、42の高台部側面はヘラによる調整を加えている。高台径は順に6.4㎝、5.0㎝、5.1㎝、7.7㎝で、44は6.2㎝を測り、底部外面はすべて回転糸切りとなっている。高台が高く体部が深い42や40は時期的に古く、11世紀代の可能性があり、高台が認められず浅いタイプの44は13世紀の所産と思われる。

45は須恵器こね鉢の口縁部で、46はこね鉢の底部であろう。45の口径は30.8㎝で、口縁端部を拡張しており、14世紀の所産と思われる。46の底径は9.2㎝で、外面は回転糸切りとなっている。

47・48は須恵器壺の破片である。47の底部は径7.6㎝、外面は回転糸切りで、籾の圧痕が1箇所認められる。48は口縁部の破片で、端部を上方に折り曲げたように拡張している。細片のため径は不明である。

49は須恵器甕の体部破片で、外面に羽状タタキのようにもみえる圧痕が認められる。

（4）室町時代　（図版9－50～54、写真図版11）

50は土師器の羽釜である。鍔の幅は広く、径34.0㎝を測る。詳細な時期は不明である。

51は土師器の鍔釜（土鍋）、52も土鍋で、鍔釜の変化形態であると思われる。51の口径は19.5㎝で、鍔部分の突出度は低いことから15世紀後半以降の可能性が高い。52は口径20.4㎝で、内傾する口縁部外面の鍔状部分直下には幅1㎝前後の凹面が認められ、凹面下の体部外面には平行タタキが残存している。時期的には17世紀の近世以降の可能性がある。

53は瀬戸美濃系の菊皿片で、灰釉陶器である。小片のため径は不明であるが、内面はヘラ彫りによって菊花弁を表現している。16世紀代の所産と思われる。

54は陶器で短頸の壺片である。口縁部は外傾し、端部は下方に少し拡張しているが、欠損している。口径は16.6㎝で、丸みのある体部の肩部には波状文を櫛描きしている。全体的に灰色に近いが、部分的に橙色に近い部分も認められることと、櫛描波状文を施していることなどから、備前焼の短頸壺と判断している。時期的には16世紀後半頃の所産と思われる。

（5）近世以降

遺物包含層よりも上層から出土した磁器と煙管・古銭といった金属製品がある。

磁　器　（図版9－55、写真図版11）

55は磁器の蓋で、ほぼ完形品である。口径5.2㎝、器高3.0㎝、高台径は1.9㎝で、型づくりと思われる。全体に施釉されているが、高台下端の畳付部分は露胎となっている。白色を呈し、底部内面中央にはやや大きめの「喜」とやや小さめの「正宝」の文字が旧字体でプリントされている。

金属製品　（写真図版12）

M1は銅製の煙管吸口部分であるが、一部欠損している。残存長5.2㎝、最大径1.1㎝である。

M2は二銭銅貨で、直径3.18㎝、厚さ2.2㎜、現重量は12.6ｇを測る。表面中央には龍図が圧印され、その周囲にローマ字で価位が記されている。裏面の中央には漢字で「二銭」、その周囲には菊桐の枝飾り、上中央には菊の御紋がそれぞれ圧印されている。このコインは縦転式になっており、明治6年式である。

第３章　総　括

検出した遺構の種類には、土壙・柱穴・柵列・溝・井戸がある。このうち、土壙と柱穴の大半は調査区の中央東寄りの一番高い場所を中心に分布しており、暗褐色シルトで埋まっていた。土壙は直径１ｍ程度の楕円形を呈するものが多く、一定の間隔をおいて分布していた。土壙の深さは 15 ㎝以内と浅いことから、上面はかなり削平されたものと判断される。柱穴は密集度が高く、一部で柱穴どうしや土壙との重複も認められる。柱穴についても検出面から底までの深さが比較的浅く、遺構が営まれた当時の地表面は後世の削平を受けているものと思われる。

柱穴・土壙の一部からは弥生時代前期末～中期初頭の甕・壺などの土器片のほか、サヌカイト細片や石鏃が出土している。また、下層包含層からも石斧や石鏃が出土していることもあわせて、これらの遺構群が弥生時代前期末から中期初頭の竪穴住居跡や掘立柱建物跡や墓の一部であった可能性がある。

ただし、柵列については土器細片が出土したにとどまるため、その所属時期を明らかにすることができなかったが、中世以降の可能性が高い。

一方、水田を東西に分かつ溝ＳＤ 01 とそれにつながった溜井戸ＳＥ 01 の両者が灰色細砂で埋まった遺構であり、時期的には古く考えても江戸時代初期のものではないかと思われる。また、調査区南側の一段低くなった部分にも溝ＳＤ 02 があり、少量ではあるが平安時代から鎌倉時代初頭の土器が出土している。ＳＤ 03 についても平安時代後期の土器が出土していることから、その時期の可能性が高いが、極めて小規模の溝であり、性格等は不明である。

出土遺物の大半は土器類であるが、数点の石器と金属器がある。それらは遺構および遺物包含層などから出土しており、時期的には弥生時代前期末頃～中期初頭、奈良時代、平安時代後半～鎌倉時代、室町時代、近世および近世以降にわたっている。

弥生時代前期末頃～中期初頭の遺物には土器のほかに石鏃や石錐・石斧などの石器類があり、大半が土壙や柱穴から出土したものである。また、確認調査時にも包含層もしくは土壙上面から土器・石器が出土している。弥生時代前期末頃～中期初頭の土器には壺・甕を中心に鉢も認められる。打製石器では、縄紋時代からの古相を示す特徴を有しているものが多い。

奈良時代の土器は包含層から出土したものに限られる。奈良時代前半に属する可能性が高いものが多く、飛鳥時代に遡ると思われるものも認められる。

平安時代後半～鎌倉時代の土器は溝および包含層から出土している。11 世紀に遡ると考えられるものから、鎌倉時代末頃のものまで認められ、器種も多岐におよぶ。

室町時代の土器類には須恵器・土師器のほか、国産陶器が認められるが、１点が溝から出土している以外はすべて包含層に含まれていたものである。

近世以降の遺物には土器類のほかに煙管と古銭がある。土器類には輸入陶磁器・国産陶磁器・土師器・瓦があり、井戸ＳＥ 01 埋土から出土したものが多くを占め、近世初期に属するものが多い。なお、古銭は二銭銅貨である。

今回の調査では、弥生時代前期末頃～中期初頭の集落跡の可能性がある遺構群を発見するとともに、弥生時代から江戸時代以降までの遺物が出土した。調査地点の北東には弥生時代前期から後期まで継続する、弥生時代の中心的集落である社・大塚遺跡が存在する。今回の調査によって、弥生時代の早い段階の居住範囲が、これまで想定されていた範囲を超えて、広範囲にひろがっていたことが判明した。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たなか・たではら いせき
書　　名	田中・藤原遺跡
副 書 名	地域連携推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	兵 庫 県 文 化 財 調 査 報 告
シリーズ番号	第３８６冊
編 著 者 名	岸本一宏　山本誠
編 集 機 関	兵 庫 県 立 考 古 博 物 館
所　在　地	〒675-0142　兵 庫 県 加 古 郡 播 磨 町 大 中 １ 丁 目 １ 番 １ 号　　TEL. 079-437-5589
発 行 機 関	兵 庫 県 教 育 委 員 会
所　在　地	〒650-8567　神 戸 市 中 央 区 下 山 手 通 ５ 丁 目 １０ 番 １ 号　　TEL. 078-341-7711
発 行 年 月 日	2011年（平成23年）３月24日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田中・藤原遺跡（たなか・ふじわらいせき）	兵庫県加東市（かとうし）田中（たなか）	28228	230462	34度 54分 40秒	134度 57分 19秒	20070109～20070131 20090116～20090303	確認370㎡ 全面調査 600㎡	地域連携推進事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田中・藤原遺跡	集落跡	弥生時代前期末頃～中期初頭	土壙７基 柱穴多数	土器・石器	
		中世～近世	溝状遺構・柵列・井戸	土器類	
		近代		金属製品	

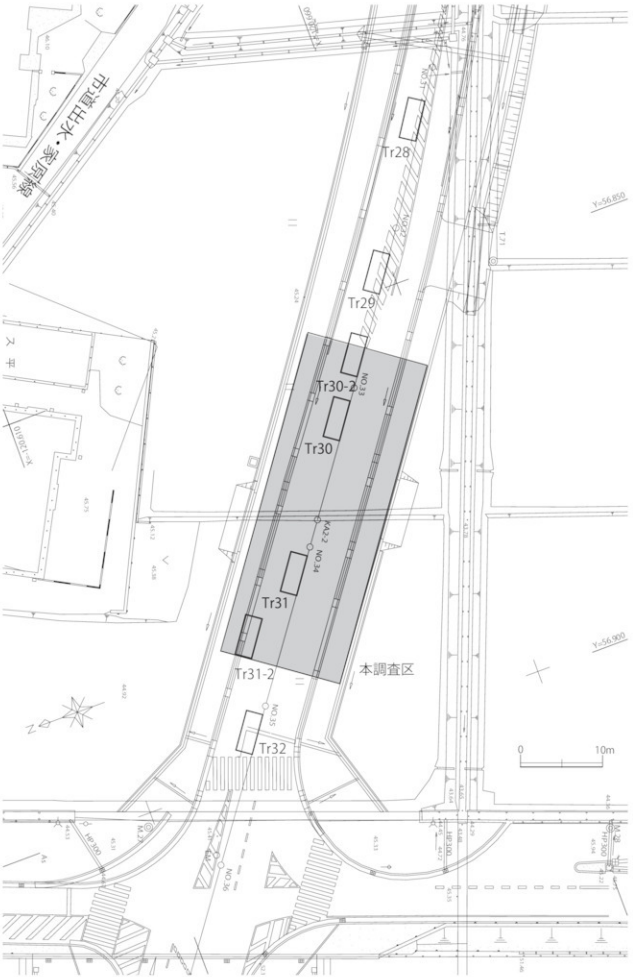
要　　約

道路建設にかかる、水田部分に位置する弥生時代前期末頃～中期初頭を中心とした集落跡の調査。

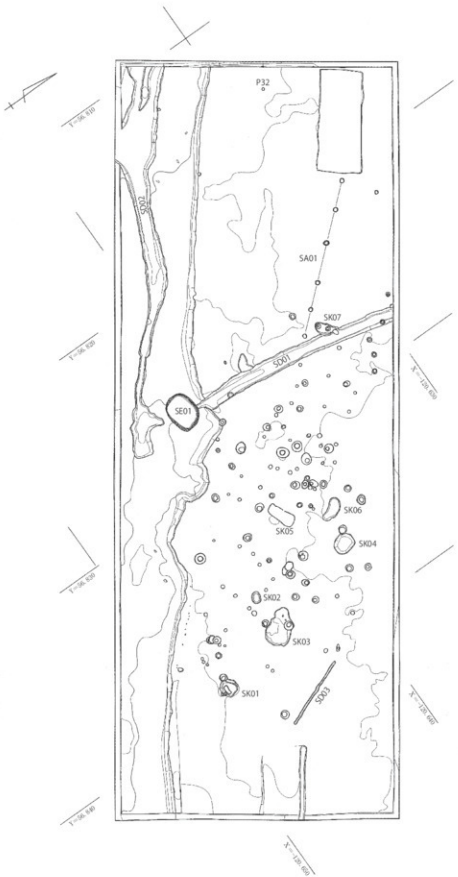
弥生時代の遺構には土壙や柱穴が多数認められ、そのなかには竪穴住居跡と想定されるものや墓と推定されるものも発見された。遺物には土器のほか石器があるが、総量は多くはない。

弥生時代以外の遺構には、柵列や柱穴、溝・井戸があるが、時期的に明確にできるのは井戸であり、近世初頭のものである。溝については、井戸と連続するものについては井戸と同時期と思われるが、遺物はやや古い様相を示す。柵列の時期は不明である。

その他、包含層より奈良時代の土器や平安時代後半～鎌倉時代、室町時代の土器などが出土した。

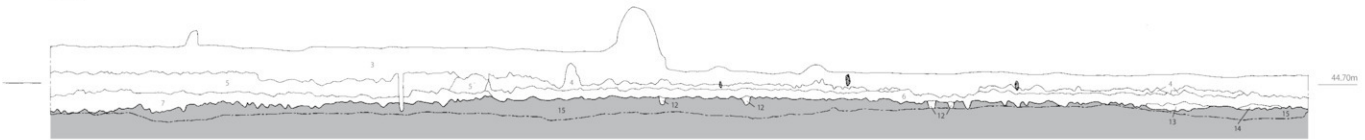


確認調査・本発掘調査区　位置

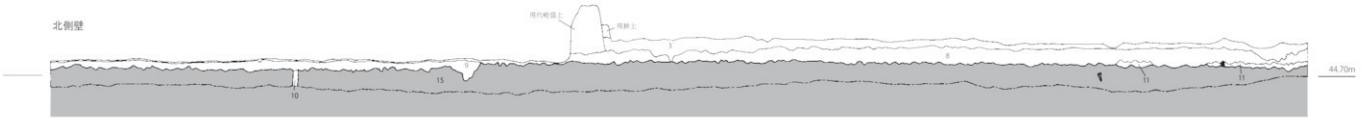


本発掘調査区　検出遺構全体

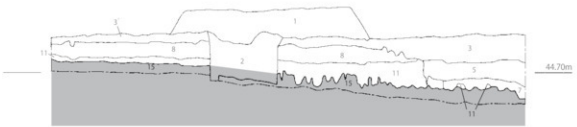
南側壁



北側壁

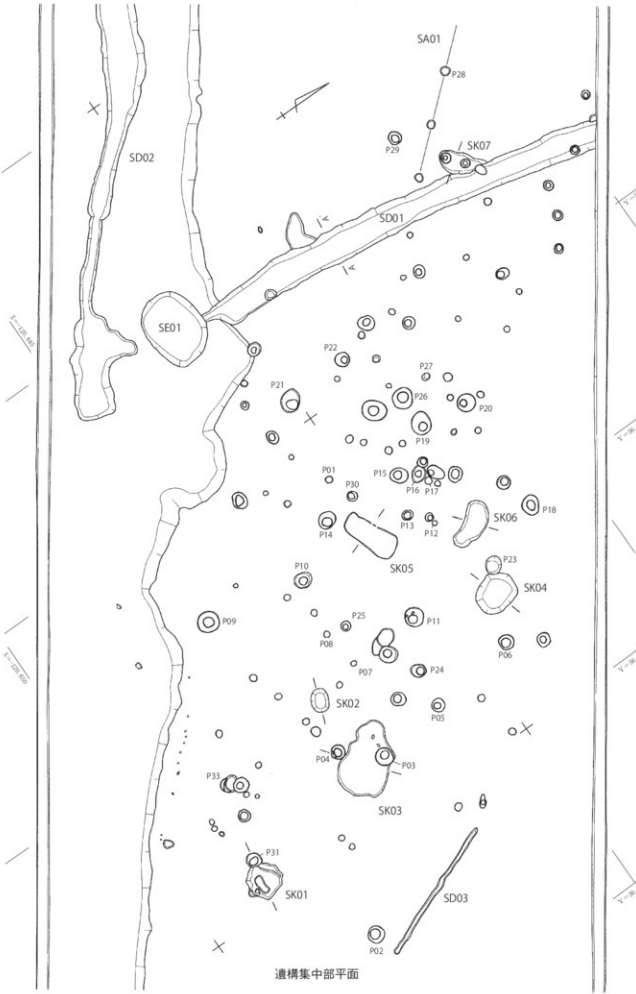


東側壁

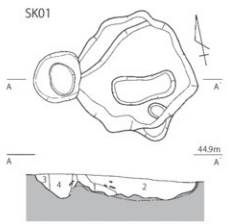


１．盛土（本体工事仮設道）
２．撹乱（確認調査トレンチ埋戻し土）
３．圃場整備時盛土＋一部に現耕土混じる（礫・粗砂混じり土）
3'．10YR3/2　黒褐色　シルト～細砂がベースとなる　3層に比べて礫が少なくやや均質
４．2.5Y3/2　黒褐色　粘質シルト　圃場整備前の耕土
５．10YR5/2　灰黄褐色　粗砂混じり粘質シルト　8層の二次堆積と思われるが、遺物の量はかなり少ない
5'．10YR5/2　灰黄褐色　細砂～シルト　粗砂・事大の礫混じる
６．2.5Y5/1　黄灰色　粗砂混じりシルト
７．10YR6/2　灰黄褐色　粗砂～小礫　一部に11層を含む
８．10YR5/2　灰黄褐色　粗砂混じり粘質シルト　上面と下面に酸化鉄の帯があり、中位にマンガン粒を含む
鎌倉～近世の遺物を含む　複数時期の水田床土か
９．　暗灰黄褐色　シルト
10．地山に9層が混じる
11．10YR3/3　暗褐色　粗砂混じり粘質シルト　植物由来の層か　南半では地山面との境界部に凹凸があるが北半ではほぼ水平　弥生～平安の遺物を含む（取り上げ層並：下層包含層）
12．10YR5/3　にぶい黄褐色　細砂～粗砂　溝
13．10YR5/2　灰黄褐色　シルト混じり粗砂～細砂　ＳＤ02
14．10YR5/2　灰黄褐色　粗砂～細砂　ＳＤ02から流れた分の堆積か？
15．2.5Y7/6　明黄褐色～2.5Y8/2灰黄色　粘質シルト　北半の方が黄色強い

土層断面

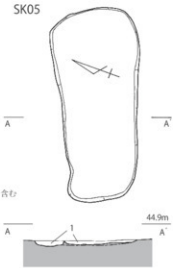

SA01
P28
P29
SK07
SD02
SD01
SE01
P22
P27
P21
P26
P20
P19
P01
P15
P30
P16
P17
P18
P14
P13
P12
SK06
SK05
P23
SK04
P10
P25
P11
P09
P08
P06
P07
P24
SK02
P05
P04
P03
P33
SK03
P31
SK01
SD03
P02

遺構集中部平面

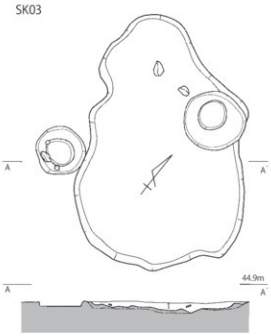


1. 10YR3/2 黒褐色 シルト 地山ブロック含む
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 地山ブロック含む
4. 10YR2/2 黒褐色 シルト 炭化物含む

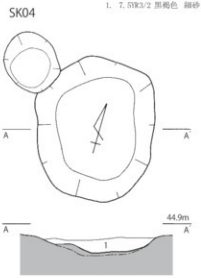
1. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト～細砂 地山ブロック含む
2. 7.5YR3/4 暗褐色 シルト



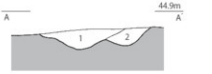
1. 7.5YR3/2 黒褐色 細砂



1. 7.5YR4/3 褐色 粗砂混じりシルト炭化物含む

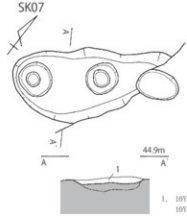


1. 7.5YR3/2 黒褐色 細砂～粗砂に
7.5YR5/2 灰褐色 シルト混じる



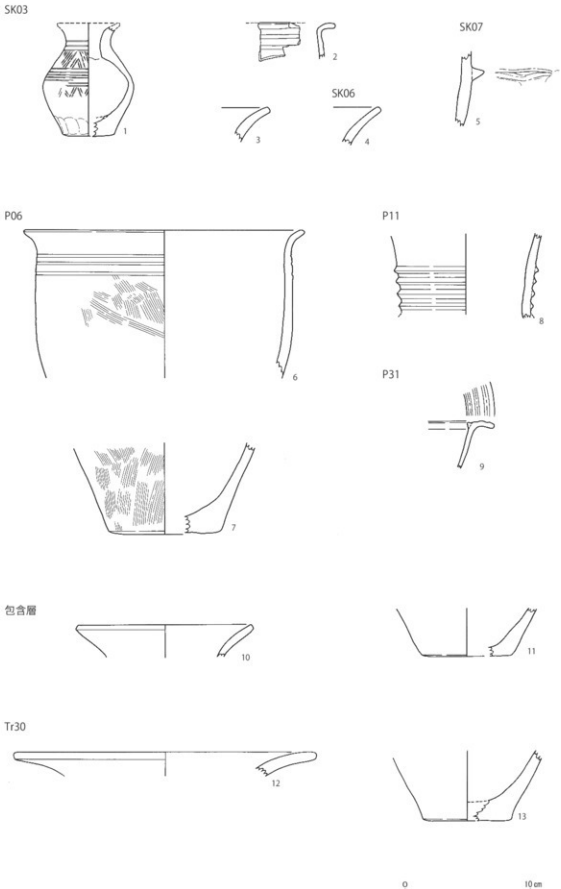
1. 10YR5/2 灰黄褐色 小礫・粗砂混じりシルト～細砂
マンガン・酸化鉄含む
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 小礫・粗砂混じり細砂
マンガン・酸化鉄含む

1. 7.5YR3/2 黒褐色 粗砂混じりシルトに
10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じる
2. 10YR4/6 褐色 細砂～粗砂

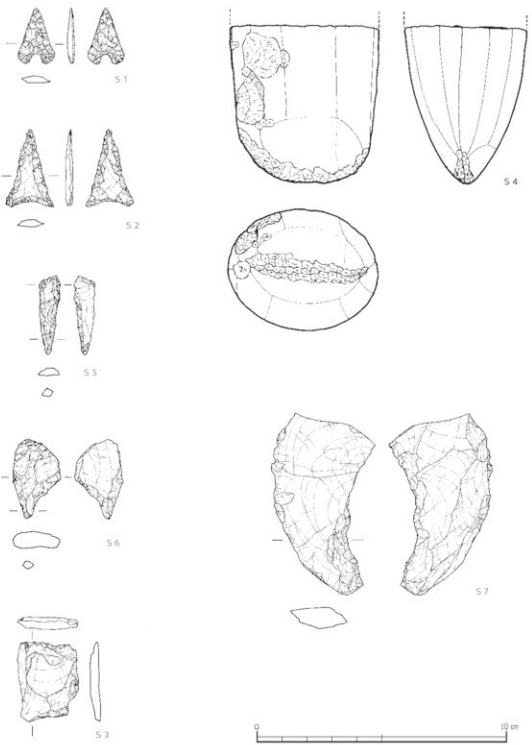


1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルトに
10YR2/2 黒褐色 シルト混じる

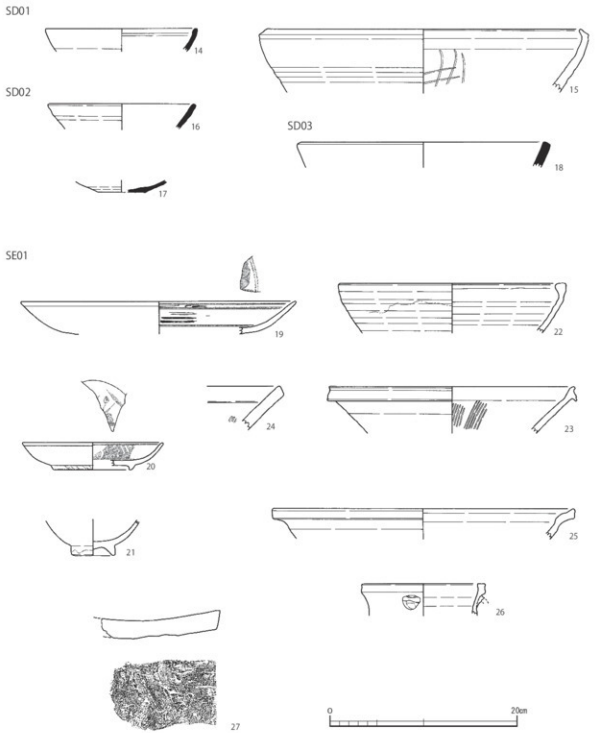
土壙・溝



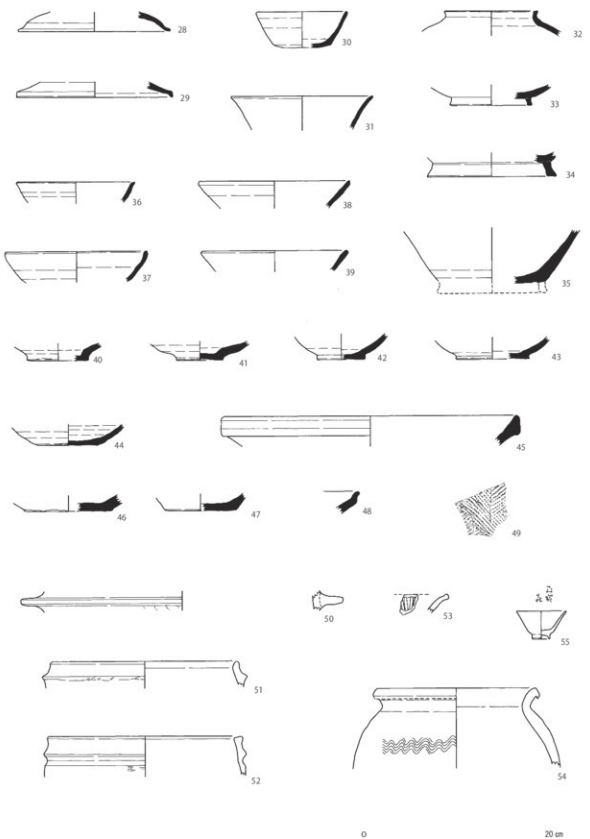
土壙・柱穴・包含層出土弥生土器



土壙・包含層出土石器



溝・井戸出土土器類


28
30
32
29
31
33
34
36
38
37
39
35
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
53
55
51
52
54
0
20 cm

包含層出土土器類

遺跡遠景（北から）

遺跡遠景（南から）

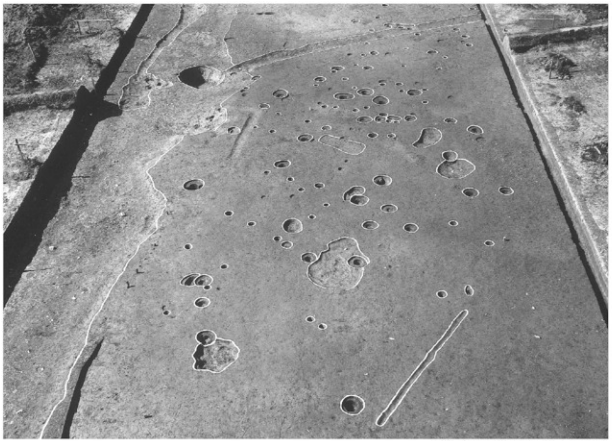
遺跡遠景（西から）

松尾（宝塚）古墳（北から）

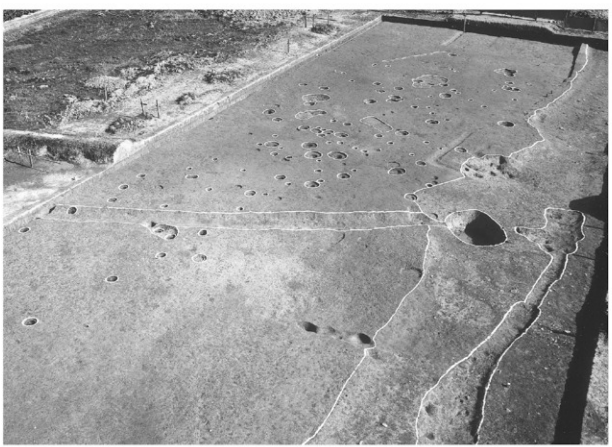
調査区全景（空中写真・西から）

調査区全景（東から）

調査区全景（西から）



調査区中央遺構集中部（東から）

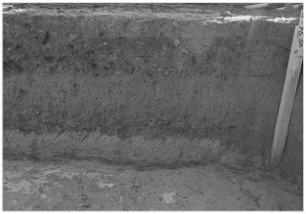


調査区中央遺構集中部（南西から）

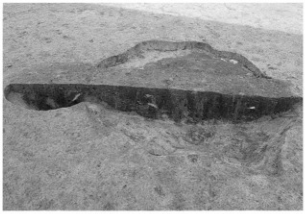
①東壁（北端）土層断面（西から）

②東壁（中央北部）土層断面（西から）

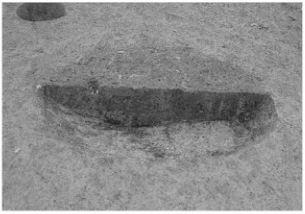
③東壁（南部）土層断面（西から）



④東壁（南端）土層断面（西から）



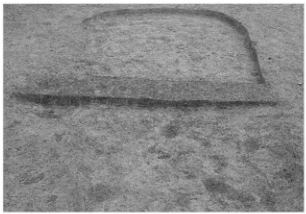
⑤ SK01 埋土断面（南から）



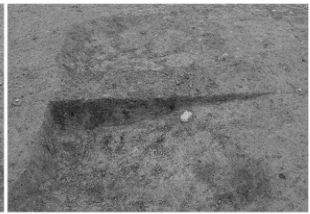
⑥ SK02 埋土断面（北から）

⑦ SK03 埋土断面（南東から）

⑧ SK04 埋土断面（南東から）

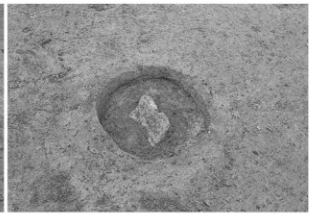


① SK05 埋土断面（南東から）

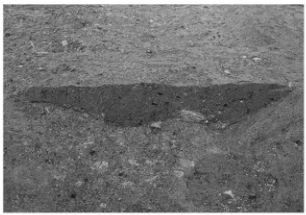


② SK06 埋土断面（東から）

③ SK07 埋土断面（南西から）



④ P01 土器出土状況（南から）



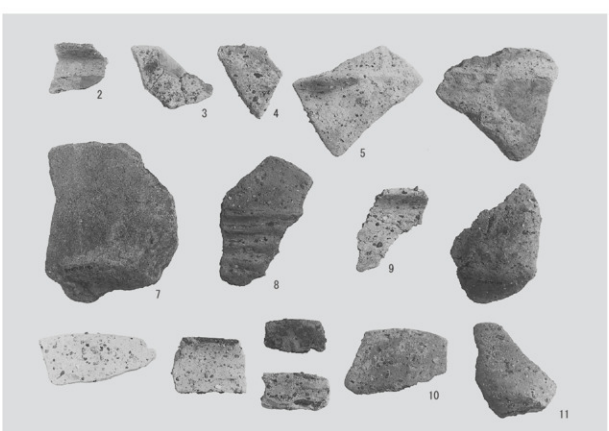
⑤ SD01 埋土断面（南から）

⑥作業風景（南東から）

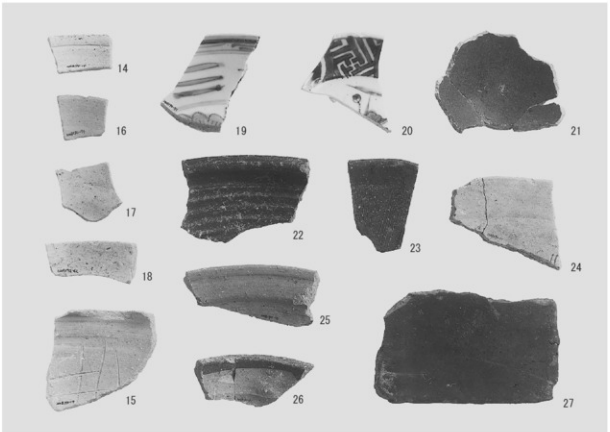
⑦作業風景（東から）

⑧調査区およびその周辺（西から）

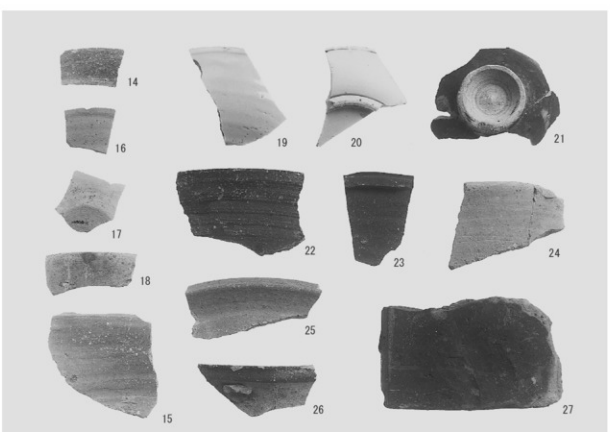
土壙・柱穴出土土器



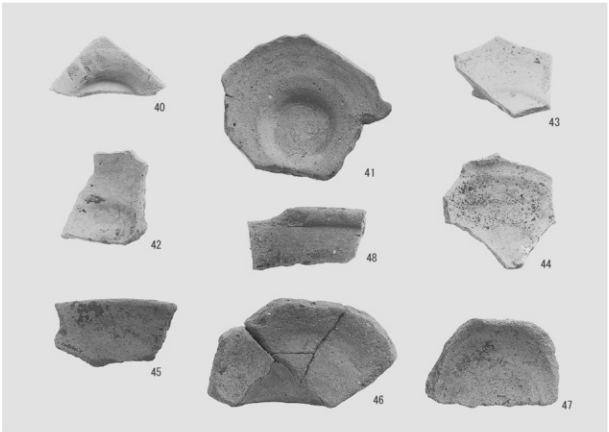
土壙・柱穴・包含層出土土器



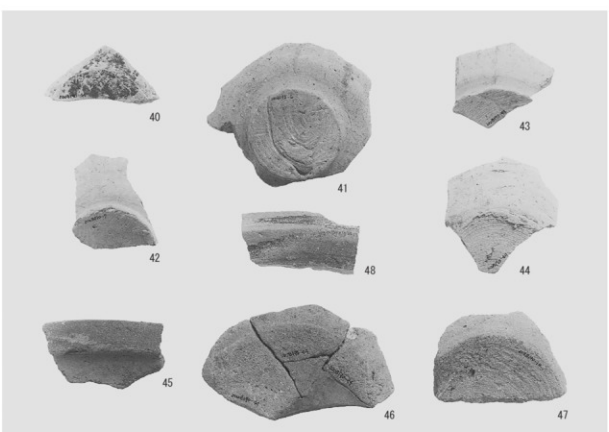
溝・井戸出土土器類（内面）



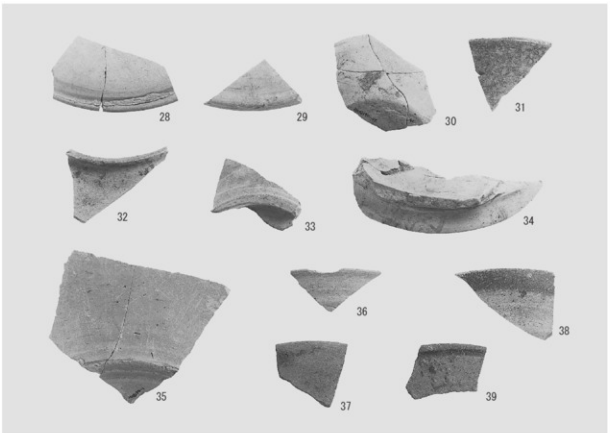
溝・井戸出土土器類（外面）



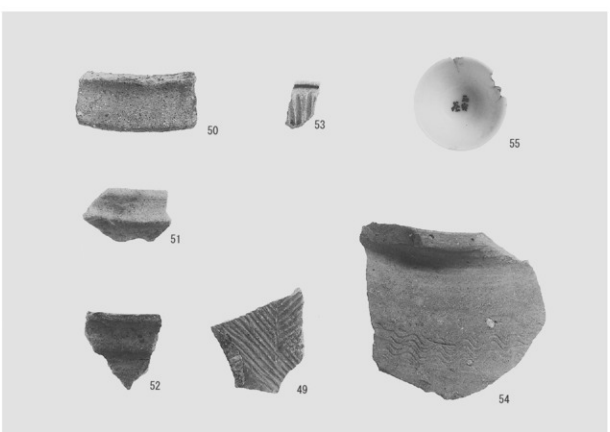
包含層出土須恵器（内面）



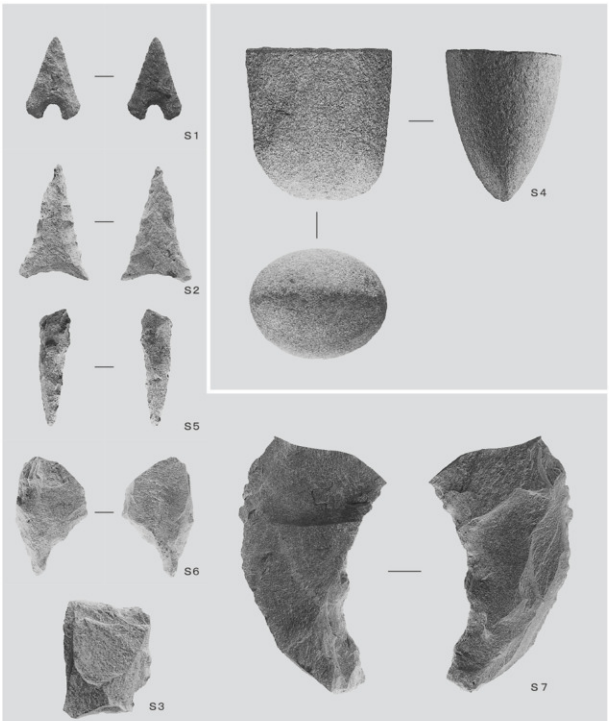
包含層出土須恵器（外面）



包含層出土須恵器



包含層出土土器類



出土石器 （S1～3・5～7：1/1　S4：2/3）

出土金属製品

出土二銖銅貨：1/1

兵庫県文化財調査報告　第３８６冊

田中・夢原遺跡

地域連携推進事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2011（平成23）年３月24日発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
ＴＥＬ．０７９-４３７-５５８９

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　富士高速印刷株式会社